



非常に難しいとされる小児の食道閉鎖症の手術をはじめ、多くの小児外科疾患に内視鏡手術を積極的に導入している。内視鏡手術は、術後に後遺症が残るリスクも少なくなるため、子どもたちの将来を見据えた治療が可能。



「疾患を治療し、元気に自宅や学校へ戻ってほしい」との想いを胸に長年診療に取り組んできた。「これからも子どもたちに継続的な診療ができるよう全力を尽くしたい」と語る。



まず患児を直接「見て、触れて、感じる」ことが大切と話す曹教授。そして最も大事なのは患児本人、両親との信頼関係を築くことと考え、つねに対話しながら診療を行なうよう心がけている。

Pediatric Surgery

「外科医師は体力が必須」との想いで、10年ほど前からマラソンを始めました。平日のうち3日は5～10km、土日は20kmほど走り込みます。毎年2回フルマラソンに挑戦していて、これまでの最高記録は3時間46分（姫路城マラソン）。これからも楽しみながら走り続けます。



曹 英樹 教授
Soh Hideki
■ 専門医
日本外科学会外科専門医
日本小児外科学会小児科専門医

医療最前線

»» vol.78

川崎医科大学附属病院
小児外科

Report!

未来ある子どもたちのために 心と体に優しい治療を

子どもたちの将来を考えた
小児内視鏡手術に取り組む。

「小児外科」とは子どもにも対して手術などの外科的診療を行なう科で、新生児から乳幼児、学童期、思春期まで幅広い年齢層に対応している。では「子どもと大人の診療では何が違うのか?」、その問いに小児外科を率いる曹英樹教授はこう答えた。

「小児は、ただ体が小さいだけでなく、すべての臓器が未熟なため手術を行なう際も成人とは異なった知識や技術が必要となります。同時に将来のある子どもたちのために少しでも創傷が小さく、後遺症などが残らないように配慮した診療が大切だと私は考えています」。

手術の質を担保しつつ、手術後の創傷をできるだけ目立たないようにするには、手術切開の場所と大きさに工夫が必要とされる。そのためには多くの症例とそれにもなる豊富な経験値が求められる。そうした想いから曹教授は、国内でも早い時期から小児内視鏡手術を自身の専門領域のひとつとして取り組み、その発展と普及に努めてきた。

曹教授が小児内視鏡手術に可能性を見出したのは一九九九年のこと。「当時ドイツ・ベルリンで行なわれた小児への胸腔鏡下食道閉鎖症手術を見学した際、感銘を受けました。食道閉鎖症の手術はそれまでは胸を切っただけで行なっていたのですが、後遺症が残る場合もありました。そのリスクを減らすこと

ができる内視鏡手術は、子どもたちにとってメリットが大きいのではとそうと確信しました」と当時を振り返る。

次に、川崎医科大学附属病院としての強みを尋ねると、「大学病院ということもあり、食道閉鎖症のような非常に難しい手術でも新生児科・小児科などさまざまな科と連携して行なうことが可能です。今後も、より難しい手術に挑めるようさらに体制を整えていきたいと考えています」と強調する。

医師として大切にしていることについて、「子どもは大人の患者さんのように、自分の症状をうまく言葉で伝えることができません。だからこそ、患児を怖がらせないようリラックスさせ、身体の異状をキャッチするよう心がけています。そのためにも患児本人と保護者との信頼関係を築くために、しっかりとコミュニケーションを図りながら、診療に取り組むよう心がけています」。

少子高齢化社会が迫るなか、曹教授は「小児医療の質をより高め、成人期までのシームレスな医療を展開していく必要があります。また、他大学や医療機関などと連携を深め、後進の指導にも力を入れていきたいと考えています」と話す。地域医療を幅広く支える川崎学園のポテンシャルを生かす曹教授の今後の取り組みが期待されている。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp>

※写真は取材用に撮影したものです

■2022年2月25日号掲載
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。